

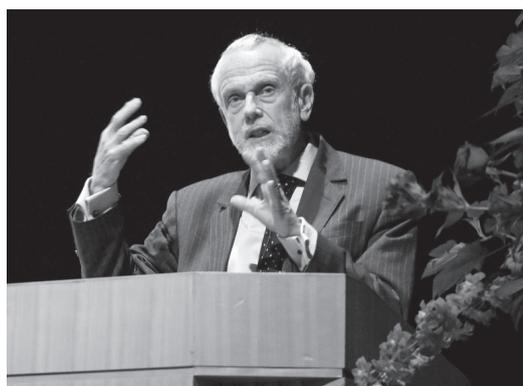
第2回小倉特別講義および連携セッションの報告

小倉特別講義実行委員会

2019年10月29～30日、福岡国際会議場において標記の特別講義とセッションを開催した。本講義は、小倉義光・正子基金活用の一環として気象学会が2018年から開催している冠レクチャーで、今回が第2回となる(小倉特別講義の趣旨は「天気」2018年5月号を参照)。講義は秋季大会2日目の授賞式前の時間帯に設定され、参加者約250名とメインホールが満員になるほどの盛況であった。

第1回小倉特別講義では、小倉義光先生に関わりの深いメソ気象学分野から講師を招聘したが、今回は学会員へのアンケートなどをもとに気象学の伝統である気象力学分野を選び、この分野では世界で最も著名な研究者の一人である Sir Brian Hoskins 教授 (Chair, The Grantham Institute for Climate Change and the Environment, Imperial College London and Emeritus Professor of Meteorology, University of Reading) をお呼びした(第1図)。講義の題目は、「ハドレーセルの力学 (The Dynamics of Hadley Cells)」で、講義と質疑応答はすべて英語で行われた。

よく知られている通り、Hoskins 教授は、Mike Wallace 教授 (ワシントン大学) や Isaac Held 教授 (プリンストン大学) とならぶ気象学の巨人である。1970年代以降の気象学の発展期において、中緯度総観規模擾乱の力学、波と平均流の相互作用、停滞性ロスビー波のエネルギー伝播とテレコネクション、モンスーンの力学など多くの研究で世界の気象力学をリードしてき



第1図 Hoskins 教授による講義の様子。

た。中でも、1985年に出版した渦位 (PV, Potential Vorticity) を活用した大気循環の理解に関する大部の論文は気象力学の里程碑とも呼べるものであり、“PV-thinking”は Hoskins 教授の代名詞となっている。

今回、Hoskins 教授が選んだ題目であるハドレー循環の力学は、気象学では最も古典的なテーマの一つである。冒頭では、18世紀の Hadley による循環の発見に始まり、20世紀後半の現在のハドレー循環の形成理論までの研究の歴史が紹介された。しかし、いまでも現役の Hoskins 教授らしく、途中からは最新の研究として、赤道対流圏上層の角運動量輸送に焦点をあて、定在波や非定常擾乱が渦位や角運動量を運ぶことで、南北半球間のジェットのスネークが運動するといった新しいメカニズムの話になった。誰でも使える再解析データに基づく図や解析であるにもかかわらず、非常にダイナミックな講義で、新しい研究に必要なのは現象への深い理解と洞察であることが痛感された。Hoskins 教授は国内に知己が多く、懇親会では再会のあいさつに訪れる教授らが多くみられたが、Hoskins 教授の「ファン」である若い学生らも積極的に話しかけていたことはこの特別講義の余録として喜ばしいことであった。

Hoskins 教授による講義の翌日、小倉特別講義と連動する形で、小倉特別講義連携セッションを開催した。これは、海外からの講師に日本の研究状況を知ってもらうとともに、講義で扱う研究分野を概観することで学会活動を盛り上げることを意図したものである。セッションは、「力学的観点からの気象・気候への理解の深化 (Deepening understanding of weather and climate from dynamical perspective)」と題して、国内で大規模気象・気候現象を力学的な視点から研究している4名の中堅研究者による講演で構成された。特に若手研究者や学生に対して刺激となるように、講演の内容は最新の研究成果を中心に、それぞれのトピックでの全体像と新しい点の位置づけが分かるようにお話しいただいた。

最初に榎本 剛 (京大) が Hoskins 教授の指導を受けることになった経緯を交えつつ、講演者の紹介をした。Hoskins 教授が長年研究してきたブロッキングに

関し、稲津 将（北大）は自らが考案したモード分解渦度方程式に基づく診断法を用いて、ブロッキングの成長における地域的な特徴を示した。山崎 哲（JAMSTEC）はブロッキングと擾乱との相互作用に関する仮説「選択的吸収メカニズム」により、2010年夏のロシアブロッキングの予測可能性や持続メカニズムの説明を試みた。Hoskins 教授が近年関心を寄せている気候変動の問題に関し、小坂 優（東大先端研）は大気海洋結合モデルを用いた「ペースメーカー実験」において、熱帯十年規模振動が北極域の気候変動を遠隔駆動することを示した。森 正人（東大先端研）は、観測データと大規模アンサンブル大気シミュレーションを用いて、バレンツ・カラ海の海氷減少が近年のユーラシア寒冷化をもたらすことを示した。座長席からは多くの聴衆が講演に集中して聴講する雰囲気が感じられ、質疑も活発であった。Hoskins 教授からの質問や

コメントもあり、後で「セッションを楽しんだ」とお聞きした。

前回にも増して、有意義な講義であったという声が多く聞かれたが、一方で期間の短い秋季大会よりも春季大会に合わせて開催してほしいという要望が多数あった。そこで、小倉特別講義実行委員会では第3回の講義を2021年度春季大会の期間中に開催することを検討している。詳細が決まり次第、学会ホームページやメーリングリストを通じてご案内するので、楽しみにお待ちいただきたい。なお、過去の小倉特別講義の動画は、会員限定で上記サイトからリンクされているので、参加できなかった皆様はぜひご覧いただければと思う。今後も、大会の講演数と時間は十分に確保しつつ、エキサイティングな小倉特別講義をお届けするように努めたい。